一日一題

ヒマラヤの太陽

AMDA理事　難波　妙

ネパールの首都・カトマンズ。そこから太陽に輝くヒマラヤ山脈を見ながら飛行機で約45分。さらに車で2時間ほど走るとAMDAダマック病院に到着する。1993年からブータン難民の医療支援を契機として国連難民高等弁務官の協力を得て発展してきた病院だ。

今年2月、同病院で帝王切開に立ち会った。16歳のお母さんのおなかに医師がぐっと手を入れてまさに「赤ちゃんを取り上げる」。新しい生命の誕生だ。元気な男の子の産声に、安堵の涙を自らの頬に感じる。

この病院の産婦人科を率いるのがビムラ医師。産婦人科医1人と総合診療医4人と共に年間約7千件の分娩を受け入れる。うち半数は困難なお産のため帝王切開だ。

彼女は「常に患者と共にあり、確かな技術力を持った医者でありたい」と昨年、岡山県の助成を受けて、岡山済生会病院で3カ月の研修を修了した。「卓越した技術を備えた医師の下、さまざまな症例から多くのことを学び、患者への献身的な対応に感銘を受けた。今後はこの経験を自らの指針としたい」と、研修の思い出を関係者への感謝とともに語った。

ビムラ医師は、毎朝6時には病棟を回診している。他の病院の研修医にも、外国の医学生にも、自分がこれまで学んだ技術と知識の全てを教える。母親が危篤の時でさえ、病院に戻って大量出血した患者の対応に当たった。そして、年に1度は車で3日かけてヒマラヤの麓へボランティアに出向き、女性たちに衛生教育の普及を図っている。祖父の故郷への恩返しだ。

ヒマラヤに昇る朝日は美しい。広大な空と山々の頂を徐々に緋色に染めて新しい一日を迎える。ビムラ医師もまた、医療の普及を目指し、ネパールの次世代を担う多くの新しい命を迎え入れている。ヒマラヤの太陽のように。